

八戸市近郊における暮らしの変遷 ～食生活を中心に～

工藤 睦美¹⁾

The report of the Living life and their changes in Hachinohe City and near Region
focussing on Food Lifestyle
Mutsumi KUDO

Key words : マチ、八戸市近郊、戦中戦後、食生活、水汲み、ヒエ飯、イワシ、昔の暮らし、出前授業

1 はじめに

郷土館では、小・中学校等へ出前授業・移動博物館を行っている。その際のテーマとして「昔の暮らし」を扱うことが多く、これらに対応した解説を行っている。子供たちには、できるだけ地域の実情を踏まえた解説が望まれるため、「昔の暮らし」について、地域ごとの様相を明らかにすることが必要である。

特にマチ（都市部）の生活スタイルを明らかにするため、平成21年度は青森市近郊における聞き取り調査を実施したが、今年度は八戸市内において調査を行った。本報告書は、話者たちの体験をもとに「昔の暮らし」についてその状況や移り変わりをまとめたものである。

2 調査方法及び内容

昔の暮らしの内容を「食生活」「衣生活」「住生活」に分け、22年度は「食生活」を中心に聞き取り調査を実施した。調査地域は八戸市近郊に設定し、話者は、八戸市立吹上公民館を中心に、近隣の小学校で子供たちの活動を支援している方々にご協力いただいた。座談会形式により、話者の方々に太平洋戦争を挟んだ戦中戦後の暮らしぶりや体験談を語っていただいた。

【話者の出身地】

八戸市吹上、八戸市中居林、名川町名久井、階上町鳥谷部、岩手県大野村ほか

【話者の年齢】

戦前生まれ、概ね昭和初期から昭和10年代生まれ

【活動場所・位置】

八戸市立吹上公民館は、八戸市庁より南東へ約1.5キロに位置し、近くには長者山新羅神社がある。学区内には吹上小学校、八戸第一中学校がある。



写真1 話者の方々

3 話者の幼年時代の状況

「昔の暮らし」の出前授業では、昔と言ってもどれぐらい前のことか子供たちがイメージしやすいよう、次のように定義している。それは、「電気・ガス・水道」が無かった頃、または使わなかったころの昔の生活である。そのため、聞き取りでは、話者が子供のころ、昭和10年代～20年代の「電気・ガス・水道」の有無について、その状況を確認した。

(1) 電気、電灯

子供の頃、電灯はあった。裸電球の電灯があった。（八戸市、名川町）

当時、電灯はなかった。笠がついた石油ランプを使っていた。（階上町鳥谷部）

昔は、しょっちゅう停電があったので、電灯はあったけど必ずランプもあった。電気が消えたとき使うように、石油ランプを備えていた。

電灯の箇所 電灯は一カ所にあった。名川町では台所にしか電灯がなかった。その電灯を（使う場所へ）持ってあるいた。電気コードが長くて、台所で食事するときはテーブルの上を持ってきて、食事が終わったらそれを居間に引っ張って行って使った。

1) 青森県立郷土館 研究主幹（〒030-0802 青森市本町二丁目 8-14）

※八戸に電灯がはじめて灯ったのは明治44年である。青森市が明治30年であることから、都市の規模に比しては遅かった。しかし、青森・弘前が火力であったのに対し、八戸は水力発電であったために、電気料金が低廉であった。そのため、利用の普及に大きく影響した。（八戸市史より）

（2）水道

昭和10年代、家に水道はなかった。ポンプ式の井戸があって、そこから毎日水汲みをした。（八戸市吹上）
共同でつるべ井戸の所もあった。また、もらい水といって、ないところはもらいにきた。水を汲んできて、大きい甕にためて使った。それから水道ができた。

簡易水道を村でやっていたので、水道を使うようになったのは昭和30年代だろう。（名川町）
場所により、共同水道のところもあり、そこでは鍵を持って行って、それで出して汲むようなやり方だった。
家の井戸から引っ張る継ぎ井戸の水道で、これでたいして楽になった。だって水がでるから。（八戸市中居林）

※水道が、八戸市民に通水されたのは昭和25年である。それまで、井戸からパイプを引っ張り、各家に簡易水道を引いていた。水道の布設は八戸市中心街を優先的に進められ、一般家庭には昭和33年頃から給水された。

「八戸圏域水道企業団だより」より

水汲み 水汲みは、嫁と子供の仕事。学校から帰ってくれば、毎日水汲みが仕事だった。水汲みは共同井戸へ行った。天秤棒を両方にかついで、バランスを崩せば半分くらいに水がこぼれたものだ。（八戸市中居林）

冬になれば、藁で囲っても井戸が凍った。うちの爺さんは世話な人で、大変だからといって、早々と井戸を掘った。そこから汲んだ水は、大きい瓶にためて使った。（名川町）

学校では、校舎の真ん中に大きい炊事場があって、そこから汲んで使った。水汲みは大変だった。顔を洗った水を捨てないで、雑巾がけに使ったものだ。（八戸市中居林）

（3）ガス

ガスはなかった。小学校の頃は、炭や薪などを使った。（※昭和31年 八戸ガス株式会社が設立された。）

4 食生活の概要

（1）食品類

① 主食

混飯 このあたりは空襲がくる前から、ヒエ飯を食べていた。米のまんまは食ったことがない。（八戸市吹上）
必ず、混ぜて食べた。アワ、麦、ヒエ、もっとひどいときは、大根を入れたり、ジャガイモを入れた。サツマイモやカボチャを入れたこともある。

混ぜる割合 米が少力で、アワだのヒエだのが多くて、茶わんに入れても、ぼろぼろっとしていた。それでも温かければ、ヒエ飯もおいしかった。イワシがあれば最高の料理だった。（八戸市吹上）

精米の度合 米は真っ白ではなかった。白米は脚気になると言って、7分搗きくらいだろう。

長男ばかり白いご飯で、昔は差をつけた。また、これは稼ぐ人の弁当のおかず、その他は大根づけや日の丸弁当といって、真ん中にどんと梅づけを入れた。その時は、長男に生まれればよかったと思ったという。（八戸市中居林）

米屋 米屋さんはあった。吹上のあたりに一軒。闇米もやっていた。（八戸市）

名川町のあたりは、たいていは百姓だから配給で買ったことはない。

白飯 白いご飯は、盆、正月やお祝いのときだけ食べた。

年取りの晩に、白飯にしょっぱい塩びき鮭を渡されて、それがおいしかった。ご馳走だった。こっちは米が元々ないから、白米を食べることがなかったから。お米があっても大事にとっておいた。普段はヒエを混ぜたご飯で、米とヒエが半々ぐらい。ヒエの方が多くて、飯粒が見えなかったという人も多い。

ひつつみ（商売をやっている家では）米は食べない。こっちでいう「ひつつみ」を食べた。結局、米がないので麦でひつつみを作った。うどんも自分の家で作ったし、餅も作った。（八戸市吹上）

② 副食

みそ汁（干し菜汁） 干し菜汁を、毎日食べた。干し菜汁には凍みトーフ、ふのりを入れて、煮干しのだしで。ねぎをこまかく切って入れる。早生の大根もあって、大根汁も食べた。大根を買うと葉っぱがついているので、葉っぱを干して春までずーと食べた。農家で採ったものを、リヤカーで売りにきた。青菜で食べるより、干した方がずっとおいしい。

漬物 大根をがらっと沢山干して、たくわんを作った。たくわん漬は、大きな樽で漬けた。少なくともひと樽。それを3つか4つ漬けた。「とが」（樽の大きいもの）に漬けた。（八戸市中居林）

イワシ おかずはイワシを漬けたもの、梅漬け、イカを漬けたもの、昼はたいていそうだった。イワシは塩の塊みたいなもの。一人で1匹か2匹だった。他に何もなければ、味噌をかけて食べた。イワシは頭を取って樽に漬け、塩をびっしりやって春まで食べる。一日中イワシの頭取りをした。箱でまとめて3箱とか買って、塩だけで漬ける。

柿も塩で漬けて、漬け柿にした。干し大根も食べた。からからに干した切り干し大根、このへんでは寒大根と言った。

魚類 魚はイワシ、とれてくるとニシン、カズノコも食べた。魚は、よく売りにきたものだ。イカがとれれば、イカばかり売りにくる。買ったイカは干しておいた。冷蔵庫はないから。(八戸市吹上)

家ではニシンを箱で買ってきて、カズノコをザルに入れて干しておいた。そうすると、学校から帰ってくると、ひよいとおつまんで食べ、ひよいと食べ、おばあさんが見た頃には空っぽになった。美味しいから、すっかり乾かないうちに食べてしまい叱られた。(名川町)

猫またぎ われわれが小さい頃は、カズノコは捨てていた。少なくなってくると貴重になったが、昔は捨てたものだ。戦前、魚は豊富だった。ニシンとかイカ、イワシの塩漬け、鮭の塩びきなど「猫またぎ」と言っていた。戦中・戦後も、ここは魚がとれていた。イカなんかも捨てた。誰もこんなの入らないって投げたものだ。(八戸市吹上)

(※猫またぎ：魚の好きな猫でさえまたいで通るの意)

鯨汁(くじらじり) 鯨汁に、凍みトーフを入れたのを食べた。鯨の油でけんちん汁も食べた。鮫(漁港)で、鯨が獲れたものだ。鯨汁のあの白いのはとても美味しかったので、みんなでよく食べた。

【豆類】

・**トーフ** 吹上のほうへトーフを売りに来た。「と一ふ、と一ふ」とラッパを鳴らして、車で、小中野の方から町のトーフ屋さんが来る。トーフを買いに行くときは、入れ物を持って行った。

農家は、豆を作っているから、トーフ屋さんに豆を持って行ってトーフに取り替えてくる。名久井の方では、100軒の部落にトーフ屋さんが3軒も4軒もあった。毎日、みな必ずトーフだから、子供は起きたらトーフ屋さんにトーフを買いに行った。豆を持って行くかお金を持って行くか。

・**きらず(おから)** あの当時、「きらず」はうまかった。あれにニンジン・ゴボウ入れて、今なら鶏肉でも入れるのかな。昔は鶏肉が入らない「きらず」入り。(八戸市吹上)

(※きらずはおからのことで、包丁で切らなくても良いということから「切らず」が転じて「きらず」と呼ばれた。)

・**煮豆** 町の人は買った。「にまめ一、にまめ一」と売りに来た。

・**納豆** 農家は、納豆も自分の家で作った。炬燵に入れて納豆を作った。百姓だと、買うのは魚だけだった。

肥(こえ)も買った。畑にかける便所くみ。鮫の方に、お得意さんを持っていて、汲みに行くとき、そこにナガイモとか持って行って肥をもらってきた。そのとき、そこで魚を買ったりもらったり。アンコウなども買ったりした。

・**凍みトーフ** 名川町の人は、子供の頃、よく凍みトーフ作りを手伝った。大豆をつぶす、ひき臼でひく。普通に、トーフのように作り、夜の寒中に凍らせる。その晩は寝ないで作ることになる。まず、仮寝をして、夜中に凍った頃に起きてきてやる。トーフは、凍みトーフの大きさに切って凍らす。凍ったのをガラガラとザルにあげて、藁をたたいたのに編む。編んで凍ったのを吊して、その晩は終わり。そうすると後は自然に乾燥する。次の日ではなく、その夜のうちに編んで干した。すると自然に溶けながら乾燥し、飴色になる。田舎だから、みんな手伝ったものだ。今は寒くないから凍らない。昔は、昼から始めると、夜には凍っていた。

③ その他の食品

卵 鶏を飼っていた家では卵はあったが、その卵は売ってしまった。家では食べない。風邪をひいたり、病気でなければ食べられなかった。(名川町)

卵は貴重だったので、それに小麦粉を入れてちょっとかさを増やした。ゆで卵よりは、焼いて醤油をつけて食べた。ソースはなかった。卵も店から買ってくる。でも、どちらかと言えば魚を食べた。(八戸市吹上)

牛乳 牛乳屋さんは、近くなかった。牛乳は脱脂粉乳のあとにでてきた。

農家では、山羊をおいて山羊の乳を飲んだ。是川の方で、だんだんと牛をおくようになってきたが、普通、食用とか乳用の牛は飼わない。牛はほとんど農耕用で、農具を引っ張らせた。

肉 肉屋さんが町の方に一軒あった。ちょっぴり行くわけではないが、三日町のあたりにあった。鶏肉が多く、豚、ウサギなどもあった。この辺でも豚を飼っていたところがある。昔は家庭の野菜くずを貯めておいて、それを豚を飼っている人がもらいにきて食べさせた。鶏は、年に一回お正月の時に、軒からつるしてコチコチに固めて、肉や出汁をとった。それぐらい。牛はめったに見ることがない。(八戸市吹上)

えんぷりとか何かのときは、鳥を殺した。卵を産まなくなれば殺すんです。(八戸市中居林)

麺類(うどん、ソバ) 自分の家で饅頭を作った。手打ち饅頭。名久井地区の農家では、自家製の小麦粉を使ったが、ソバは作ってないので、ソバ粉は買わなければならなかった。年取りにはソバを打つ。何か目出たいときはソバで、普

段はどちらかという麦で饅頭を作った。それを「はっと」と呼ぶ。宴会では「はっと」が出るとおしまい。昔は、終わり「はっと」と言うが、それはソバでなく麦の「はっと」だった。

缶づめ でっかい緑色の缶に「トマトジュース」が入っていて、給食で、そのトマトジュースをかなり飲ませられた。豆の缶づめ「グリーンピース」もあった。軍用のもので、カーキ色の大きい缶に入っていた。イカの缶づめは、イカ墨が入っていて真っ黒だった。イカ墨をとらないで作ったのか、それが不思議で頭に残っている。

【おやつ】

・**そばもち、こぶり、ごどやき** 昔は、「そばもち」を作った。中にあんこを入れるけど、それはほとんど塩味だった。在の人たちは、田植えのときに、「こぶり」を新聞紙に包んで焼いた。あれは、また美味しかった。それは「ごどやき」ともいう。うまかった。いくら紙に包んでも灰がつくから、灰をぺっぺっぺと払わなければならない。田んぼには堰があったのでいいけど、昔はよく手も洗わないで、ちゃっちゃとやった。（名川町）

・**ふすまもち** とにかく食料は大変だった。石臼で麦をひくと粉と皮になり、残った皮をふすまという。そのふすままで、「ふすまもち」を作った。粉は、饅頭やすいとんを作る。小麦は店で買うが、うちは大工やっていて田舎の人とつながりがあったので、修理代を、お金でなく物で貰うことがあった。（八戸市吹上）

・**あずきぱっと** 「あずきぱっと」は、よく食べた。「あずきぱっと」は、「はっと（麺）」に、小豆をかけたもの。はじめは、お砂糖が入っていなかったから、おいしくなかった。最近のあずきぱっとは美味しい。（八戸市吹上）

・**砂糖大根** 砂糖大根もあった。あれは甘みがあった。今はビートという。流行ったときもあった。

【パン】

・**配給** 昭和12年八戸市吹上生まれの人は、パンを買いに行った記憶がある。一般家庭にも配給があって、パンが配給になった。親に、行ってきなさいと言われて券を持って買いに行った。パン屋は三日町のあたりにあった。私たちは町に行くと言っていたが、そっちの方に買いに行った。

・**給食** 初めてパンを食べたのは、小学校の給食で。最初は脱脂粉乳のミルクだけだった。それからまもなくパンが出てきて、コッペパンを食べた。は脱脂粉乳のミルクは、おいしくないのが嫌いだった。終戦後に給食が始まって、それからパンとかあちら系のもを食べるようになった。給食でがらっと食生活が変わったと思う。

町の学校だからパンがでたでしょう。私たちは脱脂粉乳だけだった。最初はおいしくなくて、飲みたくなかった。（昭和18年名川町生まれ）。

※青森県内の学校給食の始まりは、青森県教育委員会「発足五十周年記念誌」によると、昭和21年の「学校給食の普及奨励について」文部・農林・厚生次官通達によって、翌昭和22年1月から一斉に実施された。

八戸市では、学校給食の始まりは同年1月24日で、八戸小学校で脱脂粉乳を使ったミルクだけの給食だった。八戸市吹上小学校でも、同年12月に学校給食が開始した。

【洋食】

・**シュチュー（ふすま入り）** シュチューなんていうが、昔は「ふすま」入れたもの。今思えばそんなに、旨くなかった。でも、そのときは喜んで食べた。（八戸市吹上）

・**ライスカレー** カレーライスとは、作って食べた。昔は「ライスカレー」と言った。ルーはなかったが、カレー粉があって、そのカレー粉のことを「エスピー」と言った。それに麦粉でとろみをつけた。肉はめったに食べないので、肉が入らないライスカレーだった。材料は今と同じように、ジャガイモ、タマネギ、人参などを入れた。（八戸市吹上）

④ 調味料等

醤油、味噌、酢 町の方では醤油、味噌を量り売りで買った。醤油を買うときは瓶を持って行った。何合くださいとか言った。

農家では、醤油・味噌をつくった。味噌は味噌玉にして作った。しかし、農家でも酢は買った。量り売りで、徳利みたいな入れ物もって行った。

酒 酒も量り売りで買った。

油 油は瓶をもって買いに行った。

砂糖、サッカリン、水飴作り 砂糖はないので使わない。家のおふくろは、麦から飴をつくった。それも、見つければ違反なので隠れて作った。どこから習ったのか飴を作っていた。（八戸市吹上）

砂糖は使わなかったから、甘いのをせんべいにつけるときは水飴だった。

甘みが欲しければサッカリンを使った。売っていたから。サッカリンは甘みが強い。だんだん世の中が落ち着いてく

れば砂糖の方が体にいいし、自然に使わなくなる。

(2) 炊事の施設・用具等

① 米の炊き方

囲炉裏(しびど)、鍋 名川町では、小さい頃は、囲炉裏(しびど、すぶど)で、ご飯を炊いた。次に竈(かまど)になった。昔の囲炉裏は大きい。囲炉裏の片隅にこういう鍋をあげる釜みたいなものがある、それを「しびど」と言った。(五徳とは違う。)薪を燃やしてでおつゆを煮るが、片隅に鍋をあげるしびどがあって鉄鍋でご飯を炊いた。ご飯は、しびどで、真ん中でおつゆ、「あぶろく」で魚を焼いた。囲炉裏で3つできるので、囲炉裏は畳一畳分くらいの大きさがあつた。子供がご飯を炊いたものだ。学校から帰ってくれば、親が帰る前にご飯を炊いておいた。

家族が、みんなそこに集まって暖をとる。馬に喰わせる豆を煮たりした。

竈(かまど)、つば釜 竈は、町でも使つた。八戸市吹上では、炊飯に竈とつば釜を使つた。竈といつても、昔のような大きい竈ではなく、ご飯を炊く竈が一つだけつた簡易の竈。

燃料は木で、それからガス釜になつた。その後電気になつた。

商売をやっている家では、人数が多いのでたくさん炊かないといけな。大きい竈で、大きいつば釜(一升炊き)で何回も炊いた。薪は、買つてから、割つた薪を積み上げておいた。(八戸市吹上)

七輪 七輪は病院で使つた。病院では、全部、それで食事の支度をした。

② **流し** 流しはあつた。流しの隣に水甕(みずがめ)を置いて、水を溜めておいた。昔は大きい流しだつた。

③ 食事の道具

箱膳 うちの隣は、箱膳を使つていた。一人分づつ、食べたらまたそれ(箱膳)に入れて、戸棚に入れる。食べた後にお湯を飲むから、たぶん洗つたことになる。箸もそれですすぐ。毎回は洗わないから、びっくりした。その家は井戸もないし、それで洗わなかつたのか。座敷に箱膳を並べて食べていた。昔の武士が座っているみたいに。(名川町)

飯台、テーブル うちの飯台なので、食べた後に横に立てて片付けた。家族9人が並べる大きい飯台だつた。お膳はべつの時に使つた。(八戸市吹上)

囲炉裏に飯台があつて、飯台は食べたあと起こして立て掛ける。(八戸市中居林)

④ 電化製品

洗濯機 はじめに使つたのは洗濯機だろう。とても便利になつた。子育ての頃は、おむつ洗いが大変だつたので、脱水機が手回しの洗濯機はとても役立つた。その前は、井戸水で洗濯板を使つて洗つていた。水道になつたのは、吹上地区は昭和20年代ごろと思う。それは共同の水道だつたので、そこから汲んできて使つた。そのため、水を汲んで運ぶのは井戸とあまり変わらない。結婚した昭和35年頃は、家庭に水道があつた。一番便利だと思つたのが洗濯機です。(八戸市吹上)

冷蔵庫、炊飯器 洗濯機のと、冷蔵庫や電気釜も使うようになった。

4 その他

出前授業の際、子供たちに語り伝えるエピソードとして、話者の子供の頃の遊びや学校の思い出について聞いた。

(1) 昔の遊び

金下駄(かねげた)、馬そり 昭和10年代後半、吹上生まれの人は、子供の頃、金下駄をはいて遊んだ。下駄に金(かね)があつて、雪の上をスケートのようにすべつた。その金の厚さは、初心者のは低いベターとしたもので、高学年になれば高くなる。道路が遊び場だつたので、道路で滑つた。寒風だから道路の雪が固まると凍つて、すごくいい遊び場になつた。田舎の方から馬そりがやってくると、馬そりにつかまって、すーと滑るのがとても楽しかつた。こらーと怒られたものだ。



写真2 簡易竈(昭和25年)



写真3 簡易竈(昭和25年)

紙芝居 戦後のこと、紙芝居やさんがあった。自転車に紙芝居をつけて来たものだ。ゴトンゴトンと太鼓を鳴らして、その辺を歩く。そして、アメを売るんです。そのアメを買って食べながら紙芝居を見た。ちょっとした広場に自転車を止めて、そこに子供達が集まってくる。当時のアメは棒についたアメで、棒できゅーとからめて渡された。

(2) 疎開

戦時中、八戸市吹上の人々は是川に疎開した。家から歩いて行ったので遠かった。2時間くらいかかった。馬と一緒にいる家だった。その家は、トイレが渡り板になっていて、鳴っているような気がした。変な話、トイレが揺れて動くので、自分も小さかったし、とても怖かった。早く(疎開から)帰りたいと思った。

(3) 乗り物(馬車、人力車、木炭バス)

昔は、お嫁さんも馬車でいった。農家は、たいてい個人で馬車を持っていたので、乗り合い馬車は、町でだけ利用する。並んでいて、「いいですか?」と言えば、「どうぞ」と乗せてくれる。人がたくさんいれば出発する。

馬車に乗れない人は、人力車に乗ったね。人力車はだいたい一人乗りで、ある人は、実家から八戸の親戚の家まで馬車に乗って、親戚の家から病院に行くときに人力車に乗った。まだ二十歳にならない頃だから、50年以上も前の頃。

バスやトラックはみな「木炭」だった。すぐ走ったわけではない。動くまでに時間がかかった。

※八戸市史によると、八戸市営バスは、昭和7年に営業を開始した。昭和13年には、「揮発油及び重油販売取締規則」が施行されて、「木炭バス」の代用燃料車に切り替わった。昭和19年～22年に市営バスは休止となり、昭和26年にガソリン、軽油の統制が解除されて一般貸切旅客自動車運送事業を開始した。このように、戦時中は経済統制の影響を受けて車両数を減らし、木炭バスによる営業を余儀なくされた。

5 まとめにかえて

話者の方々は、水汲みの体験をいきいきと語ってくれた。当時は、外の井戸であったり、学校の共同水道であったり、また、つるべ井戸やポンプ式の井戸など様々であった。子供だった話者たちが、毎日、仕事のように井戸から水を汲んで運んだ。天秤棒をかついだ時の水桶の重さや寒さを、懐かしく思い出していた。

郷土館では、小・中学校への出前授業として、「昔の暮らし」をテーマとすることが多い。同じ昔でも、人々の暮らしには地域差があり、また、マチ(都市部)の暮らしぶりとムラ(農山漁村)では生活スタイルが異なる。そこで、子供たちに話をするときには、前提として、「電気・水道・ガス」がなかった、または使わなかった頃の暮らしに焦点をあて、話をすすめている。

話者の方々が小さい頃、ガスはまだない。電灯は一か所にしかなかったと言うが、「夜になれば、早く布団に入って、毎日、父親の昔話を聞いた」と懐かしむ人もいる。電化製品は使わなくとも、それが普通だった。しかし、水道については、それがなかった頃の水汲みの大変さを誰もが共有しているのである。

奇しくも、筆者が、アフリカのケニアで暮らしたとき、その2年間は、水の思い出ばかりだ。ケニアの村では水道がなくて、雨水を溜めて使った。水道があって、蛇口をひねれば水が出る。そんな普通の暮らしは、とても有り難いものである。

平成22年は、水道が八戸市民に通水されて60周年となる。一般家庭には昭和33年頃から給水されたとなると、水道(簡易水道ではない)歴は50年余りともいえる。戦争をはさんで、実際に過ごしてきたそのような時代を、道具の変遷や暮らしの知恵とともに、子供たちに伝えていきたいと思う。

6 謝 辞

本稿を作成するにあたり、聞き取り調査にご協力いただいた八戸市立吹上公民館で活動する話者の方々及び吹上公民館館長 新山淑子氏、そして加藤桂子氏に深く感謝いたします。

主要参考文献

- 八戸市史編纂委員会 1976 八戸市史 通史編
- 八戸市史編纂委員会 2007 新編八戸市史 近現代資料編Ⅰ
- 八戸市史編纂委員会 2008 新編八戸市史 近現代資料編Ⅱ
- 八戸市史編纂委員会 2009 新編八戸市史 近現代資料編Ⅲ
- 八戸市史編纂委員会 2010 新編八戸市史 近現代資料編Ⅳ
- 八戸市史編纂委員会 2010 新編八戸市史 民俗編
- 八戸圏域水道企業団 2010年5月号 八戸圏域水道企業団だより「おらほの水」
- 青森県教育委員会 1999 「発足五十周年記念誌」